

八郎湖流域管理研究 第4号の発刊にあたって

八郎湖流域管理研究第4号の発刊に当たり、巻頭の言を述べさせていただきます。

八郎湖は平成19年12月に全国11番目の指定湖沼となり、水質改善が大きな課題になっています。水質改善を実現するためには、八郎湖と八郎湖に流れ込む川、川の源の森林、さらには農業活動や地域で暮らす人びとの日々の営みまでも含む流域全体での改善への取り組みが必要になります。

流域での森林と海のつながりは、かつてNHKの番組で襟裳岬の例が紹介されたことがありました。昭和49年にヒットした「襟裳岬」には「襟裳の春は 何も無い春です」という歌詞が出てきます。事実、襟裳岬一帯は明治以来、森林が荒廃し砂漠同然でした。雨で砂や赤土が海に流れ出て、海は10キロ沖まで赤く濁り、特産のコンブは死にかけていたといえます。歌がヒットしていた頃、地元では漁民や営林署職員などにより、森の再生を目指す壮絶な戦いが繰り広げられていました。半世紀にわたる取り組みの結果、襟裳岬ではブナ、ナラ、カシワなどが生長して森が再生し赤い海が青に変わり、海には再び豊かなコンブが茂りました。この襟裳岬での実践は、一度切れた自然界のつながりを取り戻すためには、地元住民を中心とした関係者のけっして諦めない強い意志と長年にわたる取り組みが必要であることを教えてくれます。八郎湖再生においても、流域でのねばり強い継続的な実践が求められます。

本誌は、地域住民、行政・NPO関係者、研究者の八郎湖流域の現状や問題点に関する正確な認識共有と共通視点の育成への貢献を目的に発刊されました。

今回の第4号では、「八郎湖の汚濁負荷の実態と水質改善の取り組み」と題して研究報告3題を掲載しました。一つめは、八郎湖の水質改善に有効な水田管理技術とその効果を示したものです。二つめは、八郎湖の水質と水質汚濁機構についてこれまで蓄積してきた測定値を基に詳細に解析した報告です。三つめは、八郎湖における有害藍藻類の季節的変動について分子系統解析などを基にして解析した結果の報告です。いずれも、研究者が八郎湖の現場から得た結果をもとにそれぞれの分野から現状をとりまとめたものです。さらに、本号では、八郎湖流域管理研究会第3回シンポジウムの結果から、生態系を活用した水質改善のこころみ、「八郎湖で何をするか」というテーマで行った参加型ワークショップの報告、八郎湖環境を考える会の学生がアサザ基金での研修において八郎湖の未来について考察した報告の3題を掲載しました。

今回掲載した報告が、八郎湖の「水」と流域で暮らす人びとの「未来」を展望する際の一助となりましたら誠に幸いです。

秋田県立大学生物資源科学部

金田 吉弘